

ア の 爽 風 ^{かぜ}



～目次～

- 病院短信『人としての優しさ』
- 作業療法科だより
- 介護だより
- 日常の一コマ
- 『かまってよ』

瓦井 洋

主演 ナナ

6月の予定

◆誕生日会

- | | |
|--------------------|---------|
| 1病棟: 13日(金) 14:15～ | } 各病棟にて |
| 2病棟: 12日(木) 14:00～ | |
| 3病棟: 11日(水) 14:00～ | |



各病棟、誕生日会を祝いゲームをたのしみました。

誕生日会

1病棟 魚釣り～癒されますね(*'▽'*)

2病棟 ポール送りリレー大会～白熱しました(*'▽')

うちわ扇ぎゲーム～ペットボトルにかぶせた袋をうちわで扇いで飛ばせ! 皆さん真剣です(*_*;

番外編

1 ねえ、あそぼ。('ω')

2 ねえってば。('ω')/

受付 あたちとあそぼ。(='ω')/

3 あ～あ、行っちゃった。(。-)y

4 しょぼん(・ω・)

今日のナナ

ナナちゃんは、かまってちゃんです。職員にも、ご家族にも…❤️遊びのおねだりをします(*_*;)💧

えへっ (*'ω'*)

病院短信

セントノア病院 創立者

瓦井 洋

『人としての優しさ』

病院の始まりと歴史を調べてみると諸説あるようですが、私が聞いた限りでは十六世紀の中頃にフランスのある田舎町の修道院の修道女たちが、病める旅人たち（巡礼者）に無償で一夜の宿を提供し、看病（看護介護）をしたのが『病院』の始まりなのだそう。そしてこの修道女たちの優しい行いが病院の原点だとも言われているのです。私が川越と春日部に認知症専門の病院を創ろうと思った理由の一つが、まさにこの「人としての優しさ」を今一番必要としているのが、認知症の患者さんとその家族じゃないのか、と思ったのが始まりでした。今更ですが、認知症と言った病気は現在の医療では完治させることが出来ません。そしてこの病気は我々の社会からも疎まれ、病院や施設から入院や入所を嫌がられる、そんな病気なのです。そして、そんな病気の人たちを身内に持つご家族のご苦労は、察するに余りありません。

ならば長年この病院業界に身を置いてきた自分が、微力ではあっても認知症専門の病院を創り、患者さんやそのご家族の皆さんに少しでも心が休まる時間を持つてもらえたら、と言った強い思いで創ったのがこの二つのセントノア病院なのです。以前にも「事務屋の独り言」でこのセントノア病院の設立時の苦労話をしたことがありますが、今、私が思うに、そんな苦労話よりもっと大変だったのは、患者さん達を看護介護することになった看護師や介護士たちだったのではないかとつくづく思っています。看護師や介護士、どちらも一般の病院や施設ではベテランと言われる人たちでしたが、さすがに認知症専門の病院での患者さんへの対応は、一筋縄ではいかな

かったようです。それなのに私はこの病院の方針として、患者さんへの『身体拘束は絶対にしない』ことを看護介護の職員たち全員に約束させたのです。

前振りが長くなりましたが、今回の本題は「人としての優しさ」でした。この優しさは誰もが持っているはずだと私は思っているのですが、まさにこの「人としての優しさ」こそが、実は我々の病院の職員たちには絶対に必要であり必須なのです。認知症の患者さんの症状は実に様々です。特に患者さん本人が嫌だと思つことや、気に入らないこと、特に恐怖を与えることを我々がやれば、当然大声で怒鳴ったり、時には暴力を振るったりします。その最たるものが身体拘束なのです。

ですからこの病院では、患者さんの「身体拘束」は絶対にしませんし、「薬での阻止」もやりません。もちろん薬は医師の専売特許ですので、私がとやかく言うことは出来ません。が、「薬は最小限にして下さい」とお願いする事は出来ます。それでも患者さんが暴言や暴力を振るってしまう時はどうするか、ですか？ そんな時、暴力行為以外は好きなようにさせますし、笑顔で優しく話しかけます。それも1回や2回ではなく、根気よく続けます。そして私たちが敵ではなく、危害も加えないという事が分かってくれば、ほぼ2〜3週間程度でその患者さんは、本当に温和になっていきます。つまり我々は常に笑顔と優しさをもって患者さんの看護介護を行うこと。これがこの病院の大方針であり、理念でもあるのです。

少し長くなりましたのでこれで終わりますが、もしまた「事務屋の独り言」を皆さんに聞いて頂く機会があれば、次はセントノア病院とユマニチュードについてお話しをしたいと思っています。



介護だより

もうすぐ梅雨の季節になりますね。農産物にとっては恵みの雨ですが、私達にとっては気持ちがふさがちになります。そんな時は、季節の花々を見て気分を上げています。この時期の花といえばアジサイですが、アジサイにも色々な種類や色があるので、見るたびに楽しい気分になります。ですので、患者さんにも、梅雨の間の晴れた日に庭に出て季節の花々を見て、少しでも楽しんでいただけたらいいなあと思っています。

日常のーコマ

今月は1病棟の三郎さん（92歳）です。三郎さんは群馬県出身で、8人兄弟の3番目として生まれました。大学卒業後は東京電力で定年まで勤められ、定年後はセミナーの講師を8年務めていました。趣味はスキーで、現役の頃から毎年のようにスキー仲間や奥様とスキー旅行に行っていたそうです。また、定年後は家庭菜園・詩吟・水墨画・油絵など、多彩な趣味を楽しんでおられました。

87歳頃から、通帳のある場所が分からなくなる等の物忘れが目立ち始め、近くの病院で脳血管性認知症の診断を受け、デイサービスの利用が始まりました。

90歳の時に奥様が入院されている間、ショートステイを利用し奥様の退院に合わせて自宅に戻られました。その頃から認知症が進行し、ショートステイを利用していたことを全く覚えていなかったり、自宅で一日中座ったままといった症状が出てきました。自宅介護が困難になってきたところ、三郎さんの詩吟仲間の方から当院を紹介され、令和5年10月に当院に入院されました。



作業療法活動『鉢植の土づくり』

入院されてからは、歩行意欲が高く自力で歩行し、食事毎食「おいしい！」と言って残さず、きれいに召し上がっています。病棟で音楽をかけていると時々鼻歌を歌っていて、いつもおおらかで笑顔が多く、三郎さんが怒っている姿はほとんど見かけません。また、他の患者さんの危険を教えてください、話を親身に聞くなど、他の患者さんやスタッフにも優しい三郎さんです。

これから三郎さんの笑顔が絶えないようケアしていきたいと思っています。

作業療法活動『桜の生け花』

作業療法活動『桜の生け花』



作業療法科だより

気持ちの良い気候になり、外へお散歩に出かけられる日が増えてきました。当院には大きな桜の木が数本あるので、4月にはみなさんでお花見に出かけました。立派な桜を鑑賞しながら、「気持ちいいね〜」「満開だね〜」と一緒に青空の元、歌を歌って体操したり、写真を撮ったりして体いっぱい春を感じました。これから枇杷や梅の実も成るので、皆さんと収穫し、旬の味覚を味わいたいと思います。

